
神曲奏界ポリフォニカ フェイト・アッシュ

桐生 達也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神曲奏界ポリフォニカ フェイト・アッシュ

【Nコード】

N2674N

【作者名】

桐生 達也

【あらすじ】

ある一柱の精霊とある少女の物語。

プロローグ

精霊

『人間の善き隣人』、『知性ある何か』

この世界　　ポリフォニカ大陸では多くの場合に、精霊はこのように呼ばれている。

人間より遥かに長い寿命を持ち、強大な力を持つ彼等は本来人間と関わりを持つことをしなかった。

まるで空気のように、物質的な肉体を持たず、ただそこに在るだけのものだった。たがいつからか、彼等は人間と同様な自我を形成し、物質的な肉体を造り上げる術を覚え、人間の前に生物として姿を現した。

長い年月の中で、人間と精霊の仲は平和だけで成り立っていたわけではない。しかし、多くの精霊は興味という意味で人間に友好的で、中には人間のように暮らす精霊も少なくはない。

しかし、人間と精霊は違う存在だ、精霊を嫌う人間や人間を嫌う精霊も少なからずいる。

さて、もし精霊と人間が争ったらどちらが滅びるかなどは考えるまでもなく、人間が滅びる。前にも言ったが精霊の力は人間にとって圧倒的だ。

だからこそ、精霊と人間の関係の中核となる者達が必要となり、それを担う者達が現れた。

それは　　神曲楽士だ。

神曲楽士

精霊にとって食料とも酒とも麻薬とも言われる楽曲　　神曲を奏でる者達。彼等によって人間と精霊との間は埋められた。

神曲は時には労働の対価となり。時には好意の証明にもともなる。特異な才能の持ち主たる神曲楽士が奏でるその音楽は、精霊達を喜ばせ、異なる二つの存在が寄り添って生きていくには欠かせないものとなった。

強大な力を持つ精霊。さらにそれを従える神曲楽士という職業は、しばしば多大な畏敬の念を以て語られる。もう一度言うが精霊の力は強大だ、もし神曲で精霊を操り悪用すれば、それは脅威以外の何者でもない。だからこそ、神曲の行使は法律や制度により厳しく律され、専門職として保護策が講じられている。

そして、そういった教育を施すのがトルバス神曲学院、ポリフォニカ大陸の中でも屈指の実績を誇る。神曲楽士を育成するための専門学校の一つだ。

その門は狭いと思いきや解放的で、毎年多くの入学者がいる。が、それに対して卒業生は恐ろしいほどに少ない。これは神曲楽士の道の険しさを表しているのだろう。

そしてこれからそんな学院に在学する生徒の一人の話をしよう。

静寂につつまれた廊下、誰もいない教室を窓からはいる夕陽の光が照らしていた。

窓の外では多くの学生達は学業から解放され帰っていく。そんな中、自分の技術を高めようと残っていく生徒も少なくない。

第十三実習室

ここも残つていく生徒に解放された教室の一つだ、もっとも実習室を使うには事前に許可が必要だが……

教室の中は他と同じく夕陽により紅く照らされている。だが、一つ大きな違いが存在する。

静かな他の教室と違い、そこでは美しい旋律が紡がれていた。旋律を奏でているのはこれまた美しい少女。学生とは思えない大人びた風貌、綺麗な一言に尽きる整った顔立ち。しかし、その顔には焦りが含まれていた。

表情に出てしまうほどの焦りは当然の如く曲にもあらわれ、時たま美しい旋律はみっともなく乱れる。

「ッ!!」

乱れた事に更に焦りが生じてしまう。少女は焦ってはいたが、負の連鎖となった曲を冷静に判断し、このままでは意味がないと中断した。

「……………」

少女は何も言わない。少女自身は何がダメなのかははっきりしているからだ。

けど、分かっているが改善が出来ない。そんなやりきれない思いを持ちながら、その緑色の眼で自分の手を見つめる。そこに少女のものでない音が乱入した。

「おいおい、なんだよもう終わりかよ」

自分以外誰もいない教室に響いた誰かの声。少女は驚き顔を上げるとそこには、若い男の姿があった。

ありえない。と少女は思う。いくら演奏に集中……いや、集中しきれてなかったからこそ誰かが入ってきたら気付くはずだ。それも男の全容を把握したときすっと消え、代わりに別の感情が湧き上がる。

「貴方、精霊ね」

湧き上がる思いを抑えながら人間でない男に語りかける。

ありえない事はもう一つ、男の容姿だ。黒い髪に、人間にはありえない深紅の瞳。そしてなにより、その背には漆黒に輝く牙のような三対の計六枚の翼があることだ。

そう、彼は精霊なのだ。精霊ならば物質化を解いて音もなく壁をすり抜けこの教室に入ることも可能。可能性というより、少女にはそれ以外考えられなかった。その証拠に男から紡がれる言葉は肯定の意だった。

「その通りだ」

瞬間。少女の中で晴天の嵐が起きた。

神曲楽士にとって精霊は一般人よりも身近な存在だ。だが、そんな彼らにも中々お目にかかれぬ存在もいる。それは上級精霊の存在だ。

精霊は背中にある羽根の数でその位が示されている。自我と力は弱いが数が圧倒的に多く神曲楽士ならだれでも呼び出せる二枚羽の下級精霊。人と変わらない自我を持ち、力も下級精霊とは比べ物にならないほど持つ四枚羽の中級精霊。そして、個体数は少ないが、中級と同じように自我を持ち、町一つ簡単に破壊出来るほどの圧倒的な力を持つ六枚羽の上級精霊。

今目の前にいる男は六枚羽。つまり上級精霊である。心が躍るのも仕方がないことだ。

「俺はあんたの神曲を聞きにきた。ほら、奏でてみせろよ神曲学士。お前の魂の形を」

男は偉そうに言う、それに

「いいわ、聞かせてあげる」

少女は乗った。

焦る必要はない。欲しいものは今 目の前に居るのだから、手に入れてみせる。

私の神曲で！！

一曲目

神曲楽士を目指す者達が集う学院、トルバス神曲学院。

その門は広く基本条件は『十三歳以上』だけで上限は無かったりする。と言つても大人がわざわざ子供達の中に入るなんて事は殆んどない。稀にはあるが……

あるとしたらその人が周りを一切気にしないタイプか、何か周りなど気にならないほどの信念を持っているかだ。

さて、ここまでならトルバスを攻略するのは簡単そうに見えてしまう。だが、広い門に対して厳しく狭い道がトルバスにはある。

その結果、卒業生が入学生に比べて少なすぎてしまったりしてしまつのだ。

大きな要因の一つに、基本課程から専門課程にあがる進級試験、この試験で大半の生徒は落ちていく。

その試験内容は単純明解ゆえに合否がはっきりするし、神曲楽士としての全てが問われると言つても過言でないだろう。

それは

「サイキ・レンバルト 合格」

「しっ！」

教師がノートに何かを書いているのを見ながら、金髪の青年が周りに小さな光をいくつも漂わせるなかでガッツポーズとる。

「ごうかく？」 「ごうかく？」 「よし？」

青年に光が反応し次々と声をあげる。

「ありがとうな」

「ありがとう？」 「ありがとう」 「どういたしまして？」

この光達の正体、それは『知性ある何か』であり『人間の善き隣

人』、つまりは精霊である。

神曲によって精霊を呼び出すこと、それが試験に合格する唯一の事であり必須条件だ。

「次、シキ・サラサ」

「はい」

凜とした声と共に美しい黒髪が宙を舞う。

静かに演奏場所に立ち、精神こころを落ち着かせる。

そして、流れるように『ワンマンオーケストラ単身楽団』を展開して自身が操る楽器を手にとる。

楽器はフルート。

すうと息を吸い込み、準備万端。周りの生徒達や教師が見守るなか、演奏が始まった。

シキ・サラサ。

彼女の事を良く知る人物は余り居ない。彼女自身が他人と関わりが合おうとしないからだ。

簡単に、良く言えばクール、悪く言えば無愛想。

友達と呼べる者は居らず、休み時間はいつも話しかけるなオーラ全開で読書に没頭している。

「……」

今日も一人読書をしていたが、いつものと違っていた。彼女に話しかける　ある意味、勇者がいた。

「よっ！　何読んでんだ？」

サイキ・レンバルト。サラサの同級生であり、天才と言うに値する人間だ。

「……」

無視。それがいつものサラサの答えだ。

正直に言ってサラサはこの男の事が嫌い　ではなく、どうでもいい。確かに才能を認め天才と呼ぶに相応しいと思うが、余り興

味がわからない。

興味があると言えば。この男より、確か……タタラ・フォロンと言う男だ。彼は対照的に不器用で今のところ才能があるとは言えない。

まあ、それもどうでもいい部類に入るが。

「おーい、聞こえてるかあ？」

しっこい。

「……はあ、何か用？」

読書に集中しきれないと、本を開けたまま顔を彼に向ける。

「試験の合格おめでとう！」

「……それだけ？」

元気な明るい声で言う彼とは対照的に、静かな冷たい声で返した。

「まあ、それとなんで全然嬉しそうじゃないのはなんでかなあと」

「一応、嬉しいわよ。ただ、それが表に出てないだけ。そんな事よ、貴方の友達を励ましてあげたら？落ちたんでしょ、彼」

「ん、フォロンか？」

タタラ・フォロンとサエキ・レンバルトは友人関係にある。いつの日だったかサエキのほうがタタラによくちよっかいを出すようになったのだ。これだけなら、天才が落ちこぼれを憐れんできるように見えるが実際には違った。サエキのほうが必死に見えたのだ。まるで、タタラの傍に自分の居場所を作ろうと躍起になっていた。その頃と同じくして、サラサもタタラを興味をもつようになった。

「まあ、あいつなら大丈夫だろ」

自信たっぷりの表情に疑問を感じる。いつも、なぜかサエキはタタラに対して絶対の信頼があるのだ。この際訊ねてみるのもいいだろうと声を出そうとして、予鈴が鳴り響く仕方なく胸の奥に押し込めることになる。

授業は滞りなく進み。すぐに放課後が来た。

いつものように教師から実習室の鍵を借りて、練習に向かう。

「……貴方も練習？」

向かう途中に第十五実習室に入ろうとしている見覚えがある男子生徒を見かけたので声をかけた。

「え？ あ、うん。ほら、僕って落ちこぼれだから、他の人より倍練習しないと」

「そ。頑張ってるね」

彼のこういった自虐的な発言はあまり好きじゃない。

才能がないから努力するそれは当たり前だ。だが、努力をしても自信を持ってないなら、努力になんの価値があるというのだ。自分ですら信じる事ができない曲などに精霊が応えることはない。それはサラサにはよくわかっていた。

「シキさんは……限界って感じたことありますか？」

すぐに立ち去ろうとしたのだが、唐突にそんな質問をされた。

「あ、ごめん！何でもないんだ。ちょっと訊いてみただけで……」

最初は意味が分からず、訝しげな顔をしてしまっていたらか困らせたと考えたのだろう。彼は慌てた様子で謝罪を言ってきた。

「いえ、問題ないわ。限界ねえ……それだったらいつも感じてるわよ」

「え？」

彼は……タタラ・フォロンはその答えが意外だったのか、驚いた顔をして固まった。

「それじゃタタラ君、練習と追試頑張ってるね」

今度こそ彼の横を通り過ぎて自分の練習に向かう。が、

「ああ、そうそう」

サラサは思い出したように振り返ってフォロンを見る。

「限界を感じることは良いことだと思っわよ。人間って限界を目前にしてさらに頑張る事で成長出来る生き物だし。限界を感じれるってことはそれだけ頑張ってる証拠だからね」

余り感情がない普段と変わらない表情のままそう言って、今度こ

そ去っていった。

残されたフォロンは一人呟く。

「限界……か」

サラサの言葉と、午後の授業が始まるときに聞いた友人の言葉を心の中で比べながら教室に入ってしまった。

第六実習室

いつも使っている教室の扉をガラツと開ける。

「よお、どうしたんだ？ 今日はやけにご機嫌じゃないか」

鍵がかかっていて誰も居ないはずの教室の中から声をかけられた。「別に、進級試験に合格しただけよ」

それに疑問を感じることなく返しながら教室内を見渡した。夕日に照らされていたおかげで電気をつけることもなく声の主はすぐに見つかった。

「お！ 合格したか。それはよかったよかった。もし失敗して落ち込んでたらどうしようかと思っただぜ」

教室の中央にある机に腰をおろしている彼は我が事のように喜んだ後、茶化すように言う。

「馬鹿にしないで、失敗なんてする気は更々ないし。それに、もし不合格になったとしても落ち込んだりしないわよ」

彼の名前はレイン。

これは愛称で本名はまだ教えてもらってない。

「可愛いげねえなあ。それより、試験の時何を喚んだんだ？ また、ポウライか？」

ポウライ。低級精霊の一種で、力は弱く知能も低い。姿も単純で大きな光る饅頭に簡単な円と線の顔を書いて頭に小さな二枚の羽があるだけだ。だが、数が多く一般人に最もよく知られている精霊とも言える。

「……ええ、そうよ」

ただ、手を振って別れの言葉だけを言う。とりあえず動く気配は無さそうだ。

「……たく、貴方はこんな時間に女の子を一人で帰らす気？」

「へ？」

他意はないのだろう。長くはないが短くもないこの付き合いで、この精霊の性格は把握している。こういった気をつかうことが出来ないのだ。

「はあ、もういいわ。貴方に期待するだけ無駄だとよく分かってるから」

呆れながらそう言って、教室を出ようとしたその時

）　　）　　）

「歌？」

微かに聞こえる声のような音。

「居残りのお仲間さんじゃねえのか？」

「誰かしら？」

何故か分からないがとてつもなく気になる。ここからではよく聴こえない。もつとはつきりと聴きたい。そんな衝動にかられて自然と歩みを変えた。

「コ　イカ　テ……まさかな」

後ろでレインが何か呟いた様に聞こえたが、気に留めることはなかった。

二曲目

歩を進める事にはつきりしてくる歌声。

その歌は旅人の歌。

置いていったものを懐かしむ歌。

歌声は美声ではない。けど、素直で透明で心の奥にじんわりと染みるような。

純粹すぎるが故に深く聴くものの心に痕を残す。

(この教室から・・・)

教室を覗くと見覚えある少年がいた。

何故歌っているかは知らない。けど、いつまでも聴いていたいよ
うなそんな歌。

けど、そんな歌も終わりは来る。

「　　」

静かに終わった。

けど、心の中ではまだその余韻が埋め尽くしている。

「君たち、こんなところで何やってるの？」

少年はいつの間にか帰り支度を済ませ、反対側の扉から出ていっ
た所で誰かに声をかけていた。

「　　きゃあっ!？」

見てみるとそこには、今悲鳴の様な声をあげた金髪の少女ともう
一人、びくりと身を竦ませている銀髪の少女が居た。

少年は二人の反応に思わず身構えたが

「あれ？君たち　　」

暗くてよく見えないが、どうやらあの少女達とフォロンは知り合

いみたいだ。

「っと、そんな事より早く帰らないと

フォロンの歌を聴いていたお陰で時間が更に経過してしまっている。別に独り暮らしなため誰にも迷惑はかけないが、これ以上長居する必要もない。

面倒なのでフォロン達が此方に気付く前に帰りたいのだが

「ほら、帰るわよ?」

中々動いてくれないボディーガード

「.....?」

視線の先を追うとフォロンを凝視していた。

もしかしたら気に入ったの?と、思いもしたが再び眼を見るとそれは勘違いだと思わされる

その眼はまるで何か確かめるように、それでいて敵を見るような眼だった。

「 レイン? 」

「 」

声をかけてみたが返答がない、それどころか黙ったまま彼は歩きはじめた。

その行き先は、

「 おい、小僧。 」

「 え? 」

いきなり声をかけられ驚きながらも振り返るフォロン。

「 お前、何者だ? 」

彼は、レインはなぜかそう質問をした。

数分後

結局、サラサも加わり五人になった。

で、現在は

ユギリ姉妹、扉の前に居た二人の少女が自分達の経緯を説明していた。

「成る程、そういうことだったんだね」

「ふうん、ご苦労様」

苦笑混じりに言う少年と面倒臭そうに言うサラサ

まず、少女達は学園の生徒ではない、かといって学園に忍び込んだ泥棒と言うわけでもない。

少女達はこのトルバスの入学希望者で今日は見学に来ていたらしい。いや、間違っても夜の学園を見学に来たわけではなく、ちゃんと昼に来たのだがその時に忘れ物をしてしまったみたいなのだ。

で、その原因がこの少年。タタラ・フォロンの不注意から始まった。

要約すると

- ・フォロン食堂でバイト
- ・ユギリ姉妹食堂に見学
- ・フォロン、ドジ
- ・ユギリ姉妹の姉ペルセルテの服に大惨事
- ・ユギリ姉妹、仕方なくトルバスの制服を借りることに
- ・見学が終わり、ホテルに戻った後に借りた制服を着たまま帰宅した事に気付く
- ・財布をロッカーの中に忘れた
- ・財布がないと大変だあ
- ・今から取りに戻ろう！
- と、こんな感じだ。

その結果、フォロンとユギリ姉妹は知り合い、ユギリ姉妹は財布をロッカーに置き去りにしてしまったわけだ。

まあ、どちらに責任があるとは言えないため。

両者もう少し周りに気を付けよう。そして、夢中になりすぎたら負けだ。

「それで……その……できれば今回のことは他の人に秘密にしておいてもらえると、とっても助かるんですけど」

金髪の少女ペルセルテが上目遣いに二人を覗き見る。

「大丈夫よ。そんな事でうちの学園は入学拒否もおとがめも無いわよ。それに、私達みたいの下校時刻までに帰らない生徒もいるしね」

「本当ですか!？」

「うん、大丈夫だと思うよ」

少年も了承したところで

「よかったあ……ありがとうございます!」

安堵した後、ペルセルテがそうお礼を言いながら頭を下げ、その横の妹プリネシカも黙って頭を下げた。

「いや。もとはと言えば、僕が料理をこぼしたのがいけないんだから。」

本当にごめんね。お詫び、と言ってもあれだけど、よかった更衣室まで案内しようか?」

「ありがとうございます!お願いします!」

照れくさそうに言うフォロンに元氣一杯にお礼を言うペルセルテ。

「さて、話も済んだわけだし私は帰るわよ。レイン?」

「いや、こいつらに付き合ってる」

「え?なんで?」

当然の疑問、これ以上彼等に関わってメリットなんてないし、第一初めっから関わる必要なんてなかったんだ。

「…まあ、いいだろ」

お前だって、折角の可愛い後輩に冷たい人間だと思われたいのか?」

「おあいにくさま、既に冷たい人間で通ってますので」

皮肉ととられたか、サラサは冷たく言い放ってきた。だが、そんなことで終わるレインではない。

「へえ、そうなんだ。」

じゃあ明日からイメチェンと行くこうぜ?なあ、坊主。お前も暗い女より明るい女の方が好きだよな?」

「え！？それは……まあ」

曖昧に答えるしかなかったりする。実際、彼の周りに女性の影はほぼない。あつても気に入られた先輩くらいだ。

ついでに言うと、将来の彼の周りには明るくて騒がしい女性が二人ほど付きまといたりするのだが。

「ほらな？」

「ほらな、じゃないわよタタラ君は関係ないし。

なんで貴方にそんな事を言われなれないといけないのかしら？」

その後もガミガミと二人は言い争い。三人は置いてきぼりをくらっってしまった。

「えっと、タタラさん？」

ペルセルテがフォロンに声をかけた

「あ、フォロンでいいよ」

「えっと、フォロンさん。あの男の人って……」

ペルセルテが指すのはレイン。

おそらく、レインの服装が制服ではないので気になったのだろう。

「えっと、ちよつと分からない、かな」

もしかしたら、教師かもしれないが教師があんな風に生徒と言い争うのは不自然だしと二人は頭のうえに？を浮かべていた。

「……精霊」

今まで人見知りするため黙っていたプリネシカがそう言った。

「あつ！」

言われて気付く。

人型精霊、フヌビツクと人間の区別は背中にある羽根しかない。

しかも、精霊は羽根を消すことが出来るため、消されてしまったのは判別が出来なかったりするのだ。

「はあ、はあ、まったく！分かったわよ！」

言い争いの結果、サラサが折れることになった。

それをレインは満足そうに眺めた後

「ん、どうかしたか？」

ほったらかしになっていた三人が自分を見詰めているのに気付कि訊いてみる。

「えっと、その、精霊さんですよね？」

ペルセルテが恐る恐ると言う感じに質問してきたのだ。

それに、レインは「ああ」と納得して、

「ほれ、これでどうだ」

自身の象徴たる黒い羽を展開した。先がとがった蝙蝠のような羽だが、蝙蝠のように単純な形ではない。複雑な紋様をしたその羽は鋭さが際立っているが僅かに見える曲線には優しさのような暖かさが見受けられる。

「わあ〜！」

三人ともそれぞれ違うが歓喜と驚きの声をあげた。

レインはそれを見て満足そうな笑みを浮かべた。羽はその精霊の象徴ともいえる存在だ褒められて悪い気はしない。

「もしかして、えっと……？」

また、ペルセルテが何か言おうとしたがサラサの方を見て止まる。

「…ああ、名前ね。私はシキ・サラサ、サラサでいいわ。」

「はい、私はペルセルテ。こっちは妹のプリネシカです」

それぞれ改めて自己紹介を終えて、ペルセルテが再び口を開ける。

「レインさんはサラサさんの契約精霊なんですか？」

契約精霊

神曲楽士と契約した精霊の事だ。精霊は神曲楽士の神曲を糧にその力を行使するが、それをより効率的にするのが精霊契約だ。

これは精霊自身が神曲の効果を受けやすくするために自身を『調律』する行為である。

だが、自分を調律つまりはその神曲楽士にだけ特化した状態になる。

そのためにその神曲楽士から、神曲を長く貰わない状態が続くと大変な事になってしまふのだ。

神曲楽士にとっては契約精霊がいることは一流の証とも言える。

この場合は、

「クツクツ、あはははは。違う違う、残念ながら俺はサラサの契約精霊じゃねえよ。」

それにしても、俺がサラサと……クククツ、これは傑作だな」

肩を揺らし、腹を押さえながら言うレイン。どうやらツボにはいつたらしい、笑いの

「…そこまで笑う必要なんてないわよね？」

サラサは笑うレインを見て不愉快だと苛つきを隠さずに問う。

「えっと、すみません！」

ペルセルテも自分は何か地雷を踏んだのだと勘違いしたらしく頭を下げた。

「いいのよ、貴女は謝らなくて。アイツは私の契約精霊じゃなくて、ただ、一緒に憑いてるだけだから」

まだ馬鹿笑いをしているレインを睨んだままペルセルテを宥める。

が、レインはその間も

「あはははは、ヤバツ！？息がつ！ゲホツゲホツ」

馬鹿笑いを続けてやがる。

「更衣室に行くのよね？」

「え、はい。」

サラサはレインを視界の中から外し、三人に確認する。

「それじゃ行きましょ。あんな馬鹿は放っておいて」

スタスタと、先導するように足早に歩いていった。

三曲目

更衣室に向かう途中、
フォロンとユギリ姉妹の身の上話を話題にしながら暗がりの廊下を一行は歩いていった。

「僕、小さい頃から落ち込んだ時とか、弧児院の屋根に登って、空を見ながら歌ったりしてたんだよね。歌を歌うと元気が出るような気がして」

その頃を懐かしむような表情を浮かべてフォロンは言う。

弧児院

フォロンは物心ついたころには両親を亡くしており、弧児院で育ったと語っていた。親が居ないというのは同情はできてもサラサには理解できないし、ましてや精霊であるレインには理解を求める事すら不可能だろう。

それでも、彼の表情には悲しいとか寂しいと言う感情が見えなかった。もしかしたら、それを感じる暇さえなかったのかもしれない。ユギリ姉妹にしても、両親は既に居ないと言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その時ばかりはサラサは黙るしかなかった。親が居ない。それを考えると自分がどれだけ恵まれているか、幸せであるかをつくづく思う。

そんな風に一人暗い気持ちになっていた。その時

「きいいいいあああああああ！」

耳をつんざく奇声が鼓膜に響いた。

「っ!?!」

学園全体に響き渡るんじゃないかというその声を一同理解する事が出来ず困惑する。

「来たか」

いや。一柱の黒い精霊だけが何かを理解し、その上で待っていたように呟いた。

「なに!?! 今の音!?!」

得たいの知れない恐怖心を感じ、ペルセルテが震えながら声を張り上げる。

プリネシカはそんな姉にそっと付き添っている。その姿は気弱な彼女の印象と違い、守っているようにも見える。

「わ、わからない」

フォロンがペルセルテの疑問にこたえるが首を横に振るしかない。「なんなのよ、一体っ」

サラサもあの声の正体に覚えがなく、知らないものに対する恐怖が身を駆ける。

「もしかして、お化け!?!」

幽霊の類いが嫌いなのだろう、ペルセルテの顔が青ざめる。

だが

「違う、みたい」

そう言ってプリネシカが暗い廊下の先を見詰める。

三人もそれにつられて視線を投げる。

そして

「……………!?!」

「……………!?」

「……………」

三人とも反応は似て、全員顔が愕然と凍りついていた。その先に何かが見えたわけじゃない。けど、それが近付いてるのを確かに感じる。

幽霊なんて曖昧な気配じゃない、威圧的な気配、何も見えないし聞こえないが圧倒的な力の塊だと認識させられる。

どう考えても異常だ！

半ば無意識の内に膝を折りその場にへたり込みそうになるペルセルテを、咄嗟にプリネシカが手を伸ばして支える。

……………ぺた。……………ぺた。……………ぺた……………ぺた……………ぺた……………ぺた……………

裸足の足音が、何かの冗談の様にゆっくりと、怯える彼等をさらに恐怖のそこに落とす様に……………

静まり返る一同。

窓辺から差し込む優しい月光。それに照らされ、闇の奥から姿を表す一つの人影。

「え?」

フォロンが拍子抜けした声を漏らした。

廊下に立つ影の正体は少女だったのだ。

歳は十三か四。ユギリ姉妹より僅かに幼い印象を受ける。

端整に整えられた顔立ち、紅く燃えるような髪が炎のように靡く。少女には、『少女』と言う言葉は合わなかった。確かにまだ幼さを感じるが、それは大人になる途中ではなくその時点で完成を魅せていた。

可愛さの中には女王の様な気品と華美が見え。ただ、そこにあるだけでその存在を他者に与える。

「あああああああああつ」

突然　　少女が声を張り上げながら襲いかかってきた。

だん！　と床を陥没させながら蹴り、人間にはあり得ない脚力をもつて矢の様に飛びかかってきた。

「ちよいと失礼」

フォロン達に衝突する前にレインが前に出て少女を待ち構える。

レインは突進してくる少女を

横に叩いた。

少女はそのビンタの威力のせいか、はたまた突進の力が逸らされただけなのか。少女は止まることも受け身を取ることもしせずに壁に激突した。

激突とは言ったが実際には少女は壁を砕き減り込んでいた。頭がすっぽりと埋まった少女はそれに意を介した様子はなく、また動きを止めることもなく壁から剥がれぐるりとフォロン達に向く。

「やっぱり正気には戻らんか」

レインは残念そうに言った。少女の目はいまだに狂気に染まったままで、正気に戻った様子は一切見受けられなかった。

それが気に食わないのか少女は壁を殴りつける。精霊に殴りつけられてただの壁がその姿を保てるはずがなく当然のように碎かれる。少女はその後滅茶苦茶に手を振り回し、壁を床を削り、砕いていく。その姿は小さな嵐に相当するだろう。

少女を中心に飛び散る瓦礫は人間に当たれば致命傷になりうる。それをサラサ達に当たらないよう丁寧ていねいに弾きながらレインは言う。「逃げる。てか、早くこいつを鎮める」

二つ目は訳が分からないが何故か、フォロンを見ながらそう言った。

鎮める？

あんなの人間である私たちにはどうしようもないじゃない。サラサは目の前の状況を飲み込めずにそう考えたが、すぐに冷静さを持ち直していく。

あんな暴走している精霊

「っ！？ 私の馬鹿！ 行くわよ、早く！」

気づいたサラサは呆然としているユギリ姉妹に叫ぶ。

それに続いてフォロンもどいう事か理解したらしく、二人の手を引いて走りだした。

それを壁に激突しながらも追いかけてよとする少女。

「すまん。出来れば今すぐ楽にしてやりたいが……自分で撒いた種だそれくらい我慢しろよ。」

それも、またレインが立ち塞がる。少女はレインを無視して、またもや突進するが、今度は自身に突撃してくるその少女の身体を

「よつと」

受け止めた。その勢いに少し後退したが完璧に止めた。

「ぐあ、うあ、」

レインは目の前で苦しそうに喘げ暴れる少女を軽く抱き締める。

そのまま、まるで愛しい者を見つめるような眼差しでレインは呟く。

「暴走はツライよなあ、コーティカルテ？」

四曲目

レインが精霊を止めている間、フォロン達はサラサの誘導のもと廊下を走っていた。

「ねえ！ なにあれ!？」

「ペルセ

ペルセルテが酷く混乱した様子で叫び、プリネシカはそれに何て言っているのか分からないと声を漏らす。そして、その様子に事情がある程度の見込めているサラダは苦い表情をした。

ペルセルテにとつて精霊は神曲楽士に力を貸してくれる謂わば『人間の善き隣人』であり、親切な友だ。それはこうして襲われていく今も変わらない。

父親が優秀な神曲楽士であつたから、精霊は手を貸してくれる優しい存在であるという認識に拍車をかけているのだろう。

それは決して間違いではない。

大戦

三国戦争の際に精霊は人類にとって多大な貢献をしてくれた戦友だ。

その事からポリフォニカ大陸では人の名や地名に精霊風の発音をする名前を用いるようになった。それは敬意であり、ある種の精霊を神聖な存在としているからだ。

だが、精霊が人間社会に関わるようになってその在り方は変化している。

精霊にも人と同じように感情がある。当然、悪意も存在する。罪を犯して警察に捕まったり、最悪封滅される精霊もいる。

どんな時でも精霊は人間の味方とは限らないと言うことだ。

彼等は良くも悪くも人類の『隣人』なのだから。けど、多くの精霊は人間に友好的だし、人の真似事で仕事につく精霊もいる。だから、田舎育ちであるペルセルテの思いは当然かもしれない。こんな都会じゃない限り精霊を見かける自体が稀なのだから。故に一般的な見解、つまり『善き隣人』であることを信じているのだ。そして、その精霊がなんの因果か自分達を襲っている。パニックにもなっても仕方ないだろう

「……彼女は暴走してるのよ」

重い口調で混乱しているペルセルテに話しかけるサラサ。

「暴走……?」

「うん。精霊にとって神曲は糧のようなものでもあるんだ。人が物を食べることができずに飢えるように、精霊も長い間、神曲を与えられずにいると我を失い暴走することもあるんだよ」

サラサに続いてフォロンが手早く説明する。これは間違っていないが正確ではない。

実際は精霊にとっての神曲は食事ではなく 麻薬だ。

神曲を得た精霊はドーピングしたように強大な力を発揮する。それは神曲との相性が良ければ良い程に力を増し、これは精霊にとって非常な快樂でもある。

故に精霊は神曲楽士の神曲を報酬として欲しそのために人間に協力する。

ただ、一部の精霊 契約精霊達にとっては神曲は無くてもならない存在になる。

前に契約精霊については話したが、一つ付け足そう。契約した精霊が長い期間に渡り契約者からの神曲が欠乏した場合、人間には想像もし難いような苦痛に精霊が苛まれる。

それは、重度の麻薬中毒者が禁断症状に悩まされるものに似てい

ると言われている。

禁断症状に陥った精霊は、正気を失い、周りの人、精霊、物、その全てに攻撃的になり、襲いはじめる。

これが『暴走』だ。

本来ならこんな状況になるのは極稀である。

精霊契約を行っている精霊は全体的に見ると少ないし、契約した神曲楽士は契約相手の精霊が禁断症状にならないように、定期的に神曲を提供する義務を負う。これは法律にもきちんと明記されている。

それでも、神曲楽士の方が事故などにより休止したり、精霊が何らかの理由で結界に幽閉される等の特殊な状況下でこれは発生する。

「暴走した精霊を止めることはできないんですか!？」

「……一応は、あるわ」

暴走を止める方法、それは

「その精霊の満足する神曲を奏で、鎮静状態にし、少しずつ契約修正すればいいのだけだ」

要は、暴走の原因である神曲不足を補えばいいだけの話なのだが、サラサはその後の言葉が出てこなかった。

そこに、

「だけど　　なんですか!？」

ペルセルテが急かすように声をあげる。

「神曲を奏でる単身楽団がないんだよ。」

ペルセルテを落ち着かせるようにフォロンが静かに言った。

いや、フォロンも分かっていると思うが問題はそれだけじゃない。

暴走状態の精霊が契約者でない者の神曲を受け入れる？ 分からない。

第一暴走なんて見たことないし普通はあり得ないことだから、ついでに言うと、もし彼女が神曲を受けいれなかったら間違いない攻撃は演奏者に向けられる。

「…無理ね」

サラサが三人に聞こえないように小さく声を漏らした。

高いリスクの割に成功する確率は極端に低い。こらがサラサが暴走の対処法に気付いてもすぐさま行動に移さない理由だ。おそらくフォロンも同じ回答に行き着いているに違いない。

ではどうするか。あの精霊を助ける方法はあるかとも思考を巡らせるがどれも非現実的なものばかり、第一ここにメンバーで対処できるような問題じゃないのだ。

「駄目です！ やってみる前から諦めてちゃ そんなのなんにも出来なくなります！」

不意に横から声が響きサラサははっと顔を向ける。そこにはフォロンに向かって真剣な目つきで訴えているペルセルテの姿があった。先程までパニックになっていたとは思えない堂々とした声、そして希望を見つけて離さないといったその眼差しになんだかわかれないが、それでもまだ可能性だけはあると思わされるのだ。

「それに」

ペルセルテがさつきとは逆に表情を曇らせて、紅い精霊と黒い精霊がいるであろう背後をみつめる。

「このままじゃ彼女、可哀想です！」

「…え？」

意外な言葉に私とフォロンは瞬きする。

「そうだそうだ、嬢ちゃんもつと言ってやりな」

ペルセルテの言葉に続いて発破をかける見慣れた黒い精霊。

「って、なんで貴方がここにいるの！」

いつの間に帰ってきたのか、ペルセルテの言葉にウンウンと空中で頷いているレインに叫ぶ。

「足止め。もう無理」

あつさりと言いやがりましたよ、この精霊。

「そんな」

「これ以上は流石にあつちが壊れちまう」

「え？」

反論の言葉が出なくなった。壊れる？

「おい、坊主覚悟は出来たか？」

「え？あ、はいっ！」

フォロンはなんで自分にといい顔をしたが直ぐに返事をした。そこには迷いはなく

「はやく、彼女を助けてあげないと……！」

ペルセルテに気付かされた思いによる十分な覚悟があつた。

「あの精霊は限界なの？」

サラサもあの紅い少女の精霊を助けたいという気持ちはある。それ故に彼女の身を案じて出た質問にフォロン達の表情が固まった。

「いや、もう少しもつだろうが……それでも限界には近いな」

レインは顔をしかめながら悔しそうに答える。

サラサ達は知らないが、レインは過去に暴走の経験がある。だから、その痛み、苦しみ、渴き、狂気が時間を経過するたびに加速度的に上昇していくのが身に染みて分かっているのだ。

だからこそ、一刻も早くあの紅き精霊を解放してやりたい。けれど、精霊である自分には彼女を救う力はないと自分の無力さに嘆いた。

「じゃまずは単身楽団ね」

そんなレインの思いを露とも知らずにサラサは思考を切り替え必要なものをどう調達しようか考える。

そして、その答えはすぐに出た。なんせ自分たちは実習室のカギを返そうとしていたとこなのだ。その手にはまだ実習室のカギは残

つており、教室までの道も把握している。これで単身楽団は手に入
つ　　ガツシャーンツ！！

考えの途中、前方から何かを壊す音がした。
まさか、紅い精霊がもう追いついたのかと一同に緊張が走る。

視線の先には、扉を、蹴飛ばし、粉碎した、レインの姿があった。
「お、ちゃんとあるな」

彼は悪びれた顔を一切せず堂々と実習室に入っていきました、まる
「じゃなくて！」

余りにも唐突な出来事に思考停止しかけたがなんとか生還。そし
て、教室に消えたレインを追う。

「あんた！　何やってんのよ!？」

自分たちが紅い精霊に襲われているということも忘れての教室に
入ってからのサラサの第一声。

「ん、緊急事態があいつも許してくれるよ」

「あいつって誰よ!?　ああ！　もっつ！」

頭を抱えて喚く。常識的に学校の器物損害は犯罪だ。緊急事態と
はいえそれを回避できる方法を持っているにも関わらず、犯罪行動
するのは頭の固いサラサには形容できる事柄ではなかったようだ。

こんな冷静さをなくしたサラサの普段ならお目にかかれない。フ
オロン達は呆然と扉の前で立ち尽くすしかなかった。

「えっと、坊主お前楽器なんだ？」

「あ、鍵盤です」

そんな中自分のことにも拘らずまるで台風の目のように平然とし
ているレイン。

「鍵盤な。つと、これか」

いくつかあるロッカーから一つ選び、鍵を力ずくで壊して抉じ開
ける。これにまたサラサが絶叫するがレインは慣れているかのよう
にスルー。

「ピョンゴ」

中がお目当ての物であることを確認してフォロンに渡す。

「んじゃ、頑張れよ」

これで仕事は終わりと言わんばかりにレインはフォロンの肩を軽く叩き、窓際へと歩いていく。

「え？え！？」

いきなり渡されたフォロンは混乱状態だった。確かに、覚悟は出てきている。単身楽団も渡されたのもいい。だが、渡されたのがフォロン一人で、自分より優秀なサラサに渡されていないのだ。これでは一人でやるみたいではないか……

「お前一人でやるんだ」

当然の様にレインはそう告げた。

「なっ！？ 何言ってるのよ！そんなの無理に決まってるじゃない！」

フォロンの実力は知っているサラサはレインに怒鳴る。フォロンはサラサが知る限りまだ一度も神曲を奏でたことがないはずだ。そんな彼に任せるくらいなら、まだ自分のほうが確率は高いと単身楽団を要求する。

「が、これにレインは耳を貸さなかった。

「お前がやるんだ」

抗議するサラサを無視したままフォロンに告げる。その目は嘘でも冗談でもない本気の目だった。

ドンッ！

近くで何かが衝突する音がした。

「 来たか」

一柱の精霊が此方に向かっていている。

時間がない。

だが、フォロンはまだ困惑の中、演奏を始める様子には見えない。「フォロンさん！」

ペルセルテが後押しするように呼びかけるが、反応がない。何を悩んでいるかはわからないが彼なりの葛藤があるのだろう。そんな姿をサラサは冷めた目つきで見つめレインに訊ねる。

「レイン。貴方が何をしたいのか知らないけどもう限界なんじゃないかしら」

なぜレインが今日あったばかりのフォロンに期待するのは知らない。もしかしたら、精霊独特の感性とやらで彼の才能とやらを見抜いたのかもしれない。だが、それも発揮できなければ意味がないことだ。

普段から何を考えているか分からない精霊ではあった。それも最近では分かってきたと思っただのはどうやら勘違いらしい。

また、さらに近くで音が響く。恐らくも後一分かそこらあの精霊はここに来るだろう。

「くっ！」

フォロンはやっとの事で決意を固めた。単身楽団が彼の背中に滑るように背負われそして弾けた。

単身楽団が音を立てながら、からくりのようにフォロンの背で花があるいは蜘蛛の足みたいに開き、上半身を包むように展開した。

更に幾つもの『演奏情報表示窓』^{ウィンドウ}が空中に投影され、単身楽団の状態、演奏場の状況を映し出す。気温、湿度、時間、磁場、空間形状、その場に存在するありとあらゆる物が神曲に影響を及ぼすのだ。たった一人で神曲を、つまりは強大な力を持った精霊を従わせるのは、それだけ繊細と言うことだ。

展開が完了し空中に現れた鍵盤の上に手を置きいざ演奏をと言ったところで止まった。

精霊を待っているわけでも、精神を集中させているわけでもない。

レインはフォロンを観察して気づき「チツ」と舌打ちが漏れる。迷っているのだ。

どうすればいいのか？

どんな曲をどうやってどんな音で弾けばいいのか？

もし失敗したらどうなるのか？

みんなを更に危険な目に合わせるのではないか？

なんでシキさんじゃなくて僕なのだろうか？

そんな神曲を奏でることにはどうでもいいことをぐるぐると。

つもらん。ここまで煽って、まだ一步を踏み出せないのか。

あの我が儘女神が選んだにしては期待外れ……と、言うにはまだ早いか？

轟音。

今度の音は近いとかの問題ではなかった。紅き精霊は壁をぶち抜いて入ってきたのだ。

「・ミ・・ケ、タ・・ツ・・ミツ、ケタ・・」

それはもう言葉ではなく呻き声だ。痛々しくて見ていられない。再びフォロンに視線を戻すが、やはり始まらない。

「ぎぎぎいいいいあああああああ！」

絶叫。押さえていたものが溢れるようにそれは叫び、周りに暴力を撒き散らす。

天井についている電灯は割れ、床にはヒビが入り。教室も、そして彼女自身ももう限界だった。

そこに、優しい旋律が響き渡る。芯が通った真っ直ぐなそして相手を包み込むような音。レインには聞き覚えがある音、魂。

「っ!？」

瞬時に理解してフォロンから視線を外して教室中を見渡す。

そこには、見慣れた光景があった。いつの間にかサラサが単身楽団を構え演奏を始めていたのだ。その姿の向こうにはカギが壊れていたであろうロッカーがあった。

「あの馬鹿っ！」

神曲が流れば当然、紅の精霊もその存在に気付く。

「・・・チ・・・ウ・・・ガ・・・チガウ」

今まで目標があいまいだったが今度は明確な敵意と指向性もって牙をむく。

バチバチと電気を発しながら精霊と同じ色の紅い球体が浮かぶ。

精霊雷だ。

精霊が持つエネルギーの塊。その応用性は日常生活にも幅広く使われる。が、ここで問題なのは精霊雷は膨大なエネルギーの塊であり精霊が得意とする攻撃手段であることだ。

「あああああああっ!!!!!!」

絶叫と共にサラサに向かって飛来する紅い閃光。

「サラサさん！」

「っ!？」

精霊同士の戦いにおいても重要な意味を持つ精霊雷の威力は生半可なものではない。暴走しているゆえに本来の威力はないがだが、その分手加減なんて考えられてない。対象が人間などと想定されていないそれを人間がまともに食らえば、当然の如く死ぬだろう。

避けられない。演奏に必死だったこともあるだろうが第一に目の前に迫る精霊雷の速度がサラサの回避速度を余裕で凌駕していた。

頭の中で死が確信した同時に、黒い雷が目の前の脅威を相殺した。「下がっている」

低い声。それがレインから発せられた声だと、ある程度付き合っているサラサにも一瞬理解できなかった。

「レ、レイン？」

思わず演奏を中止し楽器から口を話して目の前に立つ彼に声をかけた。確かめるように

「下がっている。手を出すな。なにもするな。守れないなら次は助けない」

また、私の知らない声。サラサはその事実は無性に孤独感を感じた。

そんなサラサの状態を確認しながらレインは気にとめることなく今の出来事に呆然としているフォロンを睨む。

「おい、坊主。いい加減覚悟を決めろ、お前が演^やらないとそいつは消滅する。それでお前の望む神曲楽士になれるのか？」

「っ！」

レインの言葉によりフォロンは何か悟ったように顔をあげた。次の瞬間、二度目の紅と黒の衝突し教室を眩い光を包む。

サラサの位置からはフォロンがどうしたのかは見る事が出来ない。だが、その結果はすぐに聞こえた。

少年の心を移すような透き通る音からその曲は始まった。

教室に響き渡る、新たな旋律、癒しの音。

「神曲」

横を見るとフォロンに駆け寄ろうとするペルセルテをプリネシカが止めていた。「邪魔しちや駄目」と、

曲が始まって数秒、数度で紅と黒の衝突も収まり、フォロンの演奏。いや、神曲だけが響いていた。

「……」

サラサは何とも言えない表情でフォロンを見つめる。

特に技術が凄いわけでもない。けど、それははつきりとフォロンの心を描いていた。

自分には足りない部分を持っている。そう感じずにはいられない優しい魂を。

四曲目（後書き）

むう、うまく書けない。

どうもオリキャラを主人公にするためにフォロンの行動や心情を省くと物語の緩急がつけにくいなあ。なんか盛り上がりには欠けてしま
うし、原作キャラをうまく表現できてないorz

五曲目

「…………ふう……」

最後の音を弾いてフォロンは押し殺していた息を出す。

静かな世界。

神曲の余韻を漂わせる中、フォロンの頬が満足気に緩んだのが見える。

そして、目の前の少女に視線を移す。

動く気配のない紅の少女。手応えは十分、だけど、油断は出来ない。

「フォロンさん…………」

ペルセルテが様々な感情に揺れる声で訊ねる。

うまくいったのか、と。

ペルセルテがフォロンに近づこうとするのをサラサが止める。

「まだ駄目。いいわね？」

なにかあれば逃げろという忠告。それに頷いたのを確認し、精霊に手を伸ばすフォロンに目を向ける。

そして、それに誘われるように少女は軽やかにフォロンの方に向かう。

そして

「ごがつ。」

「え？」

恋人のように抱き合うのかと思った瞬間、少女は拳を固めフォロンの頭に降り下ろしていた。

「痛っ……！！？」

「っ！？まさか！」

「神曲失敗！？」

焦るフォロン、サラサそしてペルセルテ。

ただ驚いて眼を瞬かせるプリネシカ。

が、そんな事は杞憂に終わった。

「一体、何年待たせる気だ！」

「……え？」

いきなり吠えられたフォロンは理解できず、きよとんとする。

サラサ達も呆然と立ち尽くすなかで、一つ理解できた。

暴走していない。

つまり、フォロンの神曲は成功したのだ。

「あは、あはは」

緊張の糸が切れたサラサから苦笑混じりの声が出る。

先程まで、自分たちを恐怖させていた存在が今は一転可愛らしく。

フォロンに起こっている姿は妙に微笑ましく思えてしまう。

「痛っ！」

再びフォロンの頭に、拳骨が落ちた。

「おいフォロン」

少女は猛獣が唸るかの如き低い声で叫んだ。

彼の 名を。

「え……?」

何故この少女はフォロンの名を知っているか。暴走している時に聞こえていたのか、それとも

「私だ。コーティカルテだ」

「え? え?」

狼狽するフォロン。

何故かは知らないがコーティカルテと言う名に、聞き覚えがあるのだろう。

「まさか、忘れたとか言うのではないだろうな!？」

コーティカルテは心外だと言わんばかりに怒りで顔を紅潮させて、フォロンの襟首を掴む。

「えっと、ごめ……」

彼の性格上すぐに謝ると思っただが、それすら少女によって止められた。

コーティカルテの右拳が、真っ直ぐフォロンの顔面に炸裂することによって。

「…ねえ、あの二人って知り合いなの?」

サラサが、鼻血を出しているフォロンに再び叫ぶ少女を見ながら隣にいるレインに訊ねる。

が、返事は返ってこなかった。

見ると、彼は始めっから居なかったかのように静かに姿を消していた。

「はあ。もう、わけわかんないわね」

黒き精霊に呆れながら、また、二人の痴話喧嘩に耳を傾ける

「これがお前のシナリオか？」

暗い夜。

屋上で月明かりに照らされながらフォロン達がいる教室を見ている男に問う。

「ええ、まさか貴方まで関わってくるとは思いませんでしたけどね」
優しい青年の様な顔立ちをした男が、笑みを張り付けた様子で答えた。

「ハッ！よく言うぜこの狸が」

レインが鼻で笑うのに対して、男はそれに微笑で答えた。

それを気にする様な事はない。

お互い知り合いと言うには関係が深いし、かといって仲間と言うには複雑な部分がある。

でも、そのお陰でお互いの事をよく知っている。

だからこそ、レインは言った。

「コーティカルテは俺のだ。お前が好き勝手扱ってんじゃねえよ、消すぜ？」

本気の怒り。

一般人ならそれを見ただけで震え上がるほどの怒気と威圧を込めて男に告げた。

「クスツ それはすいません。ですが、彼女はフォロンくんという
神曲楽士を見つけました。すでに、貴方ではないのでは？」

「それこそ愚問だ。

人間と精霊の関係なんて一種の遊び、心の迷い、暇潰しなんだよ。
それに、あいつが選んだんならそれはそれで興味はある」

レインが語った人と精霊の繋がり、言い方は酷いが全面的に否定する事も出来ない。実際にそう考える精霊もいるし、それだけ精霊と人間の生きてる時間には差があるのだ。

人の一生は精霊にとつての一瞬。

そんな一時に真剣になり、最後に悲しみを背負うのも精霊にとつ

て宿命ともいえる運命。

「ま、言いたいことはそれだけだ。そんなじゃ、頑張れよ学園長」
レインはそう残して静かに消えた。

綺麗な月の下。

一つの運命モノガタリが動き出す。

六曲目

あの夜の事件、廊下や教室を一つ破壊する結果になったが誰もお咎めを受けることなく、無事に解決した。

フォロンもコーティカルテと契約を結びその成果を考慮して無事に進級できることが決まった。

そして、フォロンやサラサははれて専門課程に進級していた。

「おいフォロン、次は実習訓練だぞ。急げ」

そう言って紅い可憐な少女は一人の長身の青年を強引に引っ張る。

「ちよつとコーティカルテ……」

楽しそうに頬を緩ませるコーティカルテに引っ張られながら、転ばないように早歩きをして体勢を維持する。

強引で我儘なコーティカルテと優しくいつも遠慮がちになるフォロンはいいコンビなのかもしれない。

そんな二人の微笑ましくもとれる状況を離れた位置から見て内心呆れている少女がいた。

全く、なにやってるのかしらあの二人は……

そう顔には出さずに心の中だけで溜息をつくサラサ。

トルバス神曲学院の授業構成は基本的に、午前の前半と後半、午後の部の三つ構成されていて、今は『精霊史詳論』の授業を終えて後半の『実習訓練』を受ける教室に移動する途中である。

訓練実習ときくとなんだかすごいことをするように感じるが実際はそんな大したことはない。コンマン・オーケストラ 単身楽団も用いて演奏をするだけだ。

だが、この単身楽団は複雑な機械であり扱うのも素人には難しく、そこから更に新曲を奏でようものなら地道な訓練は欠かせない。

専門課程にあがった生徒の殆どが神曲を奏でることが出来る。

「なあ。今日って実習あるよな？」

「ひゃ!？」

突如背後から声をかけられ、普段の彼女には似つかわしくない声をあげてしまった。

「おいおい、お前でもそんな可愛らしい声出すんだな？」

知っている声が再び背後からした。わざとらしい声、顔はみえないが多分、いや絶対に笑っているに違いない。

顔を真っ赤にしながら、さっきの出来事を消すように咳払いをして、

「珍しいじゃない。こんな真っ昼間から出てくるなんてどうしたの？寂しくなった？」

振り返りながら嫌味たつぷりに返す。予想通りレインが腹を抱えて笑っているのを見て憤る気持ちは更に高まった。

「生憎昼は忙しい身だね。今日は偶々用事がなかったからきただけだ」

「あら、そう。てっきり仲間がいなくて、そこら辺でいじけてるのかと思ってたわ」

本来の彼なら用事がないなんて理由だけ簡単にここには足を運ばないだろう。目的はさっき言っていたように実習訓練、つまりは神曲ということだ。

「ハッ 残念ながら長く生きてるから知り合いは多い方なんだよ。

お前と違ってな」

「ふんっ 私は好き好んで一人でいるのよ。」

と、いつものように他愛ない口喧嘩をしながら並んで歩く。

それを周りの生徒達は不思議そうに見ていた。なぜ精霊がいるの？と、

いや、精霊がいること自体はそこまで不思議じゃない。実際ここは多くの神曲楽士を産出しているため、目ばしい新人はいないかたまたま精霊がやって来ることもある。

だが、問題なのはレインが背後に出している羽根の数

六枚。上級精霊の証だ。

ただでさえ珍しい上級精霊が目の前にいて、しかも一人の少女と親しげに会話をしていれば嫌でも目立つ。

そんなことを気にすることなく一人と一柱は実習訓練が行われる教室へと足を踏み入れた。

そこでは

「貴様ツ！ 何がちびっ子か！ 私に比べれば貴様はまだおむつも取れぬ赤ん坊」

よく響く少女の声が響いていた。それに何事かと注目する同級生たちであったが大半は「またか」と、視線を外して予習に戻っている。

サラサも何事もなかったように単身楽団をとりに行く。レインはいつの間にか物質化を解いて消えていた。

精霊は生命ではない。もとは形がないエネルギーの塊であるため、こうして物質化を解くことでただ空气中をさまようエネルギーになることができる。エネルギーである以上、人間は見ることも触れることもできない。故にレインは今もサラサの近くにいるのであるであろう。

最近気づいたことなのだが、なぜかレインはコーティカルテを避けている。

だが、それについてはサラサもレインに深く追求するつもりはない。精霊は人間よりはるかに長い時間を生きている、もしかしたらその中でレインとコーティカルテの間でなにかがあったのだろうと考えたからだ。

レンバルトとコーティカルテがなにか言い争い　　レンバルトはからかっているだけだが　　、フォロンがなにか言うたびにコーティカルテの叱責が飛ぶ。もう定番になった光景を見ながら単身

楽団のチエツクをする。

そうしている間に教師が到着し開始の号令を促す。

「よろしく願います」

「あいよ。お願いされます」と。次、出席とるぞ」

彼、ミカザキにとって講師は副業であり、本業は神曲楽士ダンティストである。トルバス神曲学院の講師のなかにはミサガのように神曲楽士の資格を持つものいる。彼らは自身の事務所を開いたり、どこかの事務所所に所属しており講師とともに現場の仕事にもでる現役の神曲楽士だ。

神曲は音楽だ。音楽に特定の形はない、何かを惹きつけるというのに決まりがないのと同じだ。

もちろん、惹きつける対象は精霊だ。

ならなにを学ぶかというと単身楽団の扱い方などの技術と、なにより重要な神曲の『在り方』に関してだ。それを現役の神曲楽士や精霊の意見から、生徒達が自ら能動的に学びとっていくしかない。

その多くの意見から生徒は取捨選択して授業を選んでいく。講師によつては真逆のことを言う場合があるのだ流儀が違うから仕方ないが生徒から見たらどちが正しいのかと悩むはめになら。だから、受けるべきと考えた授業を受けているのだ。

様々な講師達がいるが、皆が一樣に口をそろえて言うことがある。『とにかく演れ』

数をこなさなければ意味がないというのだ。

先に述べたが神曲に決まった形なんてない。故に膨大な曲を演奏し、その中から自分だけの神曲というのを見つけ出さなくてはならないと。講師はその手助けをするだけだ。

「そんじゃま……始めるか」

ミカザキ講師が出席確認を終えて出席簿を閉じると、生徒の顔を

見渡した。

「今日は前回に引き続き、精霊に指示を出してその力を誘導する練習だ。まあ相手が一柱だけで、高い知能の精霊だったりすれば口頭で指示すりゃいいんだがな。複数を一度に喚び寄せて団体行動を採らせようとするとそれじゃ追いつかない。神曲の中にある種の指示を織り込んでおいた方が精霊の側も対応しやすい」

神曲楽士の基本は、奏でた神曲で精霊を魅了することだ。

だがただ喚び寄せただけでは意味がない。神曲を対価に労働を要求しなくては神曲楽士と言えないのだ。

神曲は良くも悪くも精霊に大きな影響を及ぼしてしまう。作業によつては喚び寄せてから指示を出すより、神曲に指示を乗せておいた方が効率がいい。

基礎課程に比べて確かに難易度が高い授業内容である。基礎課程ではただ精霊魅了することを目的にしていたが、専門課程ではそれは『出来て当然』のことであり。そこからさらに神曲楽士に近い技術が必要な高度なものになるのだ。

だが、サラサはその内容に不安はない。逆に自分が目指す者にさらに一步近づけることに期待と歓喜が満ちていた。

その後に出したミカザキ講師の神曲を料理の例えた内容もとても興味深い。まずは商品になる料理が作れなくては意味がない、ここが精霊を喚び寄せれるかになる。次に、その料理を食べた後の客の反応を予想して料理を作る。

例えば、疲れている人これから頑張る人はスタミナが付く料理を提供するし、落ち込んでる人には刺激が強いものより慰めるような優しい味の料理がいいだろう。それと同じで精霊にも力仕事なら力強い音楽や気分が高揚する音楽がいいだろう、速さが必要なり疾走感がある音楽がいいのかもしれない。

と、サラサは解釈した。

「ま　　口で言ってもわからんだろうな」

ミカザキ講師は生徒達が困惑しているのを見てそういった。サラサは自分なりに解釈できたが例えば極端に料理の話だけだったために分かりにくい部分があったのだろう。

「さつさと実習始めるか。一人一人いちいち精霊を喚び出すことからやると時間がないからな、まあ喚び出すのは俺がやろう。ここにいる連中は進級試験を通っているんだから、種類問わなきゃ、精霊を喚び出すのは全員できるわな」

生徒にカードが渡る。このカードには精霊に伝えるための指示が書かれている。例えば『実習室の右端まで行ってそこで一回転』などだ……簡単な行動のはずなのだがこれを口頭でなく、神曲で伝えるとなるとまるで違ってくる。

ミカザキ講師が素早い仕草でランプペット型の単身楽団を展開

演奏すると、敢えて開け放しておいた扉から二体の精霊が姿を現した。

ウォルフィスという名の、狼の姿を模したセイロウの枝族の蒼い精霊。

そして個体名のない丸い球体型をしたポウライ枝族の精霊。

どちらもトルバスに常駐している精霊で生徒側も馴染み深い。ポウライに関して言えば常に学院に十数体いるのだが姿が似たり寄ったりで自我も弱いため、どれがどのポウライかと判別ができないのだ。

「おい、ちょっと邪魔するぜ」

そこに更に一体の精霊が突如姿を現した。それに生徒はおるか講師さえも驚き口を開けて呆然とする。

現れたのは羽を六枚持つ黒き上級精霊レインであった。サラサもレインがいることを知ってはいたがその予想外の行動に絶句する。

「貴様ツ

！？」

沈黙を破ったのはこの教室にいるもう一体の紅き上級精霊だった。その声には普段のじゃれあいとは比べられないほどの怒気が含まれている。

その一方的な怒りを受けた黒の精霊はそんなのどこ吹く風という顔をしながら口を開いた。

「よう久しぶりだなコーティカルテ。あの戦場以来か？」

六曲目（後書き）

夏休みが……

ストックが切れたし、夏休みも終わりますし、自分は受験生ですし

……

とりあえず、更新が遅れるようになるのを伝えておきます。でも、完結までがんばるので皆さんよろしくお願いします！

感想、意見があればなんでもいいのでいってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2674n/>

神曲奏界ポリフォニカ フェイト・アッシュ

2011年7月30日07時18分発行